

# 人格と社会構造とのインターフェースに関する研究 (1) 研究構想を中心として

藤井啓之

学校教育講座

## Study on Interface between Persons and Social Structures

Hiroyuki FUJII

*Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### はじめに

近年, J. J. ギブソンの生態学的心理学が脚光を浴びている。ギブソンの遺作であり, 彼の研究の集大成でもある『生態学的視覚論』<sup>(1)</sup>の原著は1950年の出版であるが, 彼の理論枠組みは, 彼のフィールドであった知覚心理学を超えて, 人工知能をはじめとするロボット工学<sup>(2)</sup>, 脳や中枢神経に関する研究, 精神医学, 心の哲学・特別支援教育・道徳教育<sup>(3)</sup>などに少なからぬ影響を与え続けている。

まず, ギブソンの思索に触発される限りで, 私自身の教育学的関心を述べてみたい。

第一に, 道徳教育が「心の教育」と呼ばれるようになり, 「心のノート」が作成されている。しかし, 「心」とは何なのか, 「心を教育する」とはどういうことなのか, そもそもそれは有効なことなのか, あるいは可能なことなのかという問題が, 十分吟味されないまま, イメージだけが先行して「心の教育」が行われているのではない。

ここで言われる心の教育とは, 人々の行為・行動の「司令塔としての心」を指しているのか, あるいは「感情教育」的なニュアンスが込められているのか, どちらなのだろうか。

前者であれば, ギブソニアンは「司令塔としての心」という発想自体に異議を唱えているので, ギブソニアンの批判に依拠した上で「心の教育」の方を放棄するか, あるいはギブソニアンに対する反論を行うか, いずれかの立場をとらざるを得なくなるだろう。また, 後者であれば, 「感情」とは何か, あるいは, 感情教育と言われるものの系譜の検討が必要である<sup>(4)</sup>。ギブソンに引きつけて考えれば, 人が生態学的世界を移動するときに感情がどのように位置づけられているのかということを検討してもよいかもしれない。

第二に, 現代の子ども・若者たちについて, 「近頃の若者は変わった」「近頃の若者は理解不能だ」と語られることがある。この際, この論調は大きく二つの傾向に分けられるだろう。一つ目は, 若者がどれほど変わったかを, やや非難めきながら, 細かな事実をあげつらって論じる傾向である。二つ目は, 逆に若者を積極的・消極的に支持する立場から, 若者が変わったことと関連する大状況的な背景について語る傾向である。後者の方が事実に近いと思われるのだが, そのような大状況の中で, 若者たちが具体的にどのような筋道でどう変わっていくのかについて必ずしも明確かつ説得的な研究が展開されているとは言い難い。

これに対して, ギブソンの知覚論は, 生態学的環境のなかで, 生体が移動しながら, 外界に規定されつつ, 外界および自己自身についてどのように理解していくのかについて, かなり具体的に論じている。また, 現代の若者論でネオ・リアリズムといわれる「いま・ここ」を重視する傾向が指摘されるが<sup>(5)</sup>, これらも, ギブソンが考察した「移動」のなかでの不変項の重要性や, 前進・後退, 可逆・不可逆などといった概念の中で, なぜいまの若者がネオ・リアリズムの傾向を帯びるのかの理解に一定の説明を与えてくれるだろう。このように, 若者論においても, ギブソンの思考枠組みのアナロジック的援用は, 新たな知見を得る可能性をひらくものと思われる。

そこで, 本論では, ギブソンの理論を端緒としながら, 人々の人格の形成のされ方を明らかにしていくとともに, それを踏まえた上での教育のあるべき姿について, 包括的な研究を行っていく際に検討しなければならない問題を総論的に論じて, 研究構想の全体像のアウトラインを示してみたい。

### ・ 研究の構想

## 1. ギブソンの生態学的世界からマルクス主義心理学の社会的世界へ

ギブソンの理論は、視覚・聴覚・触覚などを中心とした知覚心理学である。ギブソンは、「心」が知覚を統治するのではなく、知覚が「心」を作っていくと考えているのだが、しかし、そこでいう「心」は我々が道徳性や人格と呼んでいるものと同列に扱っているものなのかということについて、慎重な検討が必要になるだろう。特に、ギブソンの知覚論では、陸地・空・海・山・川・崖等々の生態学的世界（日常概念では物理的世界とも表記しうが、ギブソンは物理学的世界と生態学的世界を峻別する）を背景として知覚と心の成立について検討されている。生物が登場してくるとしても、それはもっぱら知覚対象として目の前を横切る動物か、あるいは移動することによって鏡のように知覚される自己自身のみである。

道徳性や人格がつくられる場所は、物理的世界だけではなく、制度や法や人間関係を含んだ社会的世界ではないだろうか。もしそうだとするならば、これらの社会的世界のなかで外界を知覚するとは、どういう事態なのかということについて検討されなければならないだろう。

この場合、まずはギブソニアン<sup>1</sup>の社会心理学者や哲学者などのその後の研究のレビューが必要となるだろう。同時に、ギブソンの着想を批判的に継承しながら、マルクス・エンゲルス、そして、マルクス主義心理学者であるヴィゴツキーやレオンチェフ、ネオ・ヴィゴツキー学派などに接合することは、以下の5つの点で有意義であるだけでなく、必要でもある。

まず1点目として、ギブソンとマルクス・エンゲルスがともにダーウィニズムの影響を受けているという共通点を持つことである。ギブソンのダーウィンとの親近性については、ギブソニアンがいくつか著作を発行してしている<sup>(6)</sup>。またマルクス・エンゲルスに関しては、『空想から科学への社会主義の発展』のなかの「自然は永遠に一樣な、たえずくり返される循環運動をしているのではなくて、ほんとうの歴史を経過しているのだということを証明した、といわなければならない。」<sup>(7)</sup>との記述をはじめとして、自然弁証法的、歴史弁証法的な意味でのダーウィンへの言及が頻りに及ぶ。

2点目として、マルクス主義心理学におけるルビンシュテインとレオンチェフの論争が、ギブソンの見解を考察する助けとなると思われる。端的に言えば、ルビンシュテインは、外的なものが内的なもの屈折して獲得されると捉えたが、レオンチェフは活動によって内的なものが屈折されるとした。これらの見解間の論争は、心を所与の前提とするのか、活動を通して心が作られるのかということ考察する上で、重要な論争と位置づけられるだろう<sup>(8)</sup>。特に、レオンチェフらの

活動理論は、ギブソン理論を拡張する上で重要な手掛かりとなるだろう。

3点目めとして、ギブソンの知覚心理学では、静止した地点からの観察は移動・行為する観察点の特殊な一形態としか見なされない。ギブソンにとって重要なのは、具体的な環境の中での移動と行為である。同じく、マルクスも、「フォイエルバッハに関するテーゼ」において、次のように言う。

（第一テーゼ）「これまでのあるゆる唯物論（フォイエルバッハのをもふくめて）の主要欠陥は対象、現実、感性がただ客体、または観照の形式のもとでのみとらえられて、感性的人間的な活動、実践として、主体的にとらえられないことである。（後略）」

（第二テーゼ）「人間の思惟に対象の真理が届くかどうかの問題はなんら観想の問題などではなくて、一つの実践的な問題である。（後略）」<sup>(9)</sup>

ここに見られるように、どこか抽象的な地点から眺めるのではなく、具体的世界のなかで実践することを重視する点において、マルクス・エンゲルスはギブソンの構想と同じ枠組みを持つ。

4点目として、マルクスは、感性的という言葉で、生態学的な社会を重視するとともに、下記のように「フォイエルバッハに関するテーゼ」において、社会的世界も念頭に置いている。

（第六テーゼ）「（前略）人間性は一個の個人に内在する抽象物ではおよそない。その現実性においてそれは社会的諸関係の総体である。（後略）」<sup>(10)</sup>

したがって、ギブソンの構想を社会的世界に拡張するときの、ひとつの重要なモデルとして検討に値する。

5点目に、ギブソンは自然的環境も人工的環境も区別せず、知覚の対象としているが、人類は自然的環境のアフォーダンス（affordance: ギブソンの造語）を探りながら、環境に適応するだけでなく、環境を作り変えたとともに、自分自身の身体構造を作り変えてきた。

ギブソンやギブソニアンによる研究は、人間やほかの動物の視覚や聴覚や触覚に関する研究であるから、地球の重力や太陽光、陸や海や山、大気の成分など、ほとんど変化しないか、変化したとしても地球史的な時間で緩やかに変化するものを生態学的世界として考えていた。あるいは、棒を振り回せば振り回すほど、その棒の力のモーメントや棒の長さという不変のものを知覚するといった、物理法則的なものが念頭に置かれている。

しかし、社会的世界では、社会制度やルールや生活様式などは、相対的に短い間に変化する。場合によっては、きわめて短期間に変化する。ギブソンが生態学的環境の中で考察した不変項に相当するものが、社会的世界のなか存在するのか、あるとすれば何なのか

についての考察が必要となる。ヴィゴツキーらは、系統発生、個体発生、巨視的発生、微視的発生など、さまざまな変化について考察している。これらを検討することは、ギブソンの理論を社会的世界に拡張するとき役に立つだろう。

## 2. 社会的世界の構造

また、ギブソンが言うところの生態学的世界における地平線・水平線などの不変項に相当するものを社会的世界の中に見いだす際に、構造主義をめぐる論争に注目することも有益である。

人間行動の背後に隠された固定的構造あるいは「文法」については、構造主義などによる議論があるが、これに対して人間の創発的行為を認めないことなどに対する批判が提出されている。ギブソンは、知覚する観察者が移動する際に、変化するものと変化しないものを区別し、不変項を基軸として変化を把握するという立場である。このような視点で見たときに、構造主義とそれへの批判はどのように位置づけられるのかについて検討する必要がある。

また、これに関連して、正統的周辺参加論<sup>(11)</sup>や社会構成主義の議論は有力な検討対象である。これらの立場は、構造に全面依拠もしていないが、構造を否定もしていない。構造に影響されながら行為を通して構造を改変し続けるという点で、重要な考察対象となるだろう。

さらに、現代に特有の社会的構造について議論することも必要になるだろう。ギブソンの考える生態学的世界をさしあたりランドスケープ(Landscape)と呼ぶとするならば、ソシオ・スケープ(socio-scape)あるいは、システム・スケープ(system-scape)<sup>(12)</sup>といった概念から、社会的世界の構造を読み解いていくことや、その中で、人々は社会と自己をどのように理解していくのか、どのように社会に規定されつつ、社会を規定し返していくのかという観点からの考察も、とりわけ現代特有の人格形成のされ方を明らかにする上では重要である。

## 3. 社会的世界の構造の安定性

さらに、ギブソンは不変項が重要であるとしたことに関連して、社会全体の安定性の問題も検討しなければならない。ギブソンは、陸棲生物は、重力でひきつけられるとともに、固い地面を前提にして、さまざまな能力を発達させてきたし、また、陸から地平線や水平線のような相対的に変化しないものを手がかりに人々は自分の位置や移動の方向を特定できている。もし、人間が水の中や宇宙に放り出されれば、たちまち世界と自己とを見失うだろう。

このような事態が、社会的世界についても言えるのだとすれば、我々の生きる社会的世界は、どの程度

安定していなければならないのだろうか。比喩的に表現すれば、もし、私たちの生活が、まるで高いうねりや波(これは発生しては消失する遮蔽壁となる)が広がる海上でサーフィンしているようなものだとすれば、私たちには、不変項を見いだすことは至難の業となるだろう。このような場合、私たちの時間意識や空間意識や自己意識の形成のされ方は、どのように変化するのだろうか。仮に、人間の社会的生活にも不変項が必要なのだとしたら、それは、全く無いよりは管理統制的にでも作られた方がましなのか、そうではないのか。なぜなら、子どもと接するときに、杓子定規なルールが必要と考える立場と、子どもに応じて柔軟に対応すべきだとする立場の間で、しばしば議論になるからである。あるいは、実践的に見れば、鈴木和夫が学級の中に公共ルールを持ち込むことによって、かえって子どもたちの自由な関係を作り出した実践は、このような安定した社会的世界を構築したということになるのかならないのか<sup>(13)</sup>。

流動する社会について論じる、ジグムント・バウマンらの理論<sup>(14)</sup>も視野に入れながら、流動化社会における心や道徳性や人格の形成のされ方、あるいはその可能性・不可能性について明らかにすることも、現代社会における教育を考える際には重要となるだろう。

## 4. 社会的世界における移動と参加

ところで、ギブソンは、知覚論の観点から、他人の立場に立ってみる可能性、あるいは、公共性について論じている。たとえば、地面に沿った距離の広がりについて、「等量の地形に対する等量の肌理」を認識することができるということは「ここからの距離」だけでなく、「そこからの距離」も知覚できることを意味するが、それは外界が、他者の世界からも構成されていることであるという<sup>(15)</sup>。あるいは、一群の観察者が動き回れば、同じ不変項がすべての者に知覚されるので、同じ外界を知覚することになるという<sup>(16)</sup>。

このような「公共性論」や「他人の立場論」がはたして、そのまま人間の道徳性や人格の側面に適用できるのだろうか。人間と霊長類を比較する研究のなかで、次のような実験がある。

大人が幼児と人形遊びをする。遊びの中のストーリーで、人形が大切な宝物を赤い袋に入れてから外に出かける。人形が留守の間に、大人は、幼児に見えるようにしながら宝物を青い袋に移動するという「いたずら」をする。その後、人形を帰ってこさせたときに、大人は幼児に「人形はまずどこに行くでしょうか」と尋ねる。この実験の結果、3歳児は、ほぼ100%、「青い袋に行く」と答える。つまり、人形の立場に立って考えられないのだ。ところが、同じ実践を4歳児に対して行くと、ほぼ100%が赤い袋だと答えるという。4歳児になれば、他者の立場にたって考えられるという

わけだ。同じようなことは、チンパンジーについても言える。チンパンジーやボノボ同士では、決して相手の立場に立って考えられない。2匹で共同しないとエサを取ることのできない仕掛けを作って実験したとき、まずなかなか共同できない。しばらくして共同したとしても、それによって手に入れたエサを決して分け合うことはない。これが人間とチンパンジーとの違いだという<sup>(17)</sup>。

そうだとすれば、生態学的な視覚論は、人間における公共性の問題や、道徳的な意味で他人の立場に立つことのひとつの重要な条件となっているかもしれないが、そのみで公共性すべてについて語ることはできないだろう。道徳的な意味での公共性について語る際には、チンパンジーには無くて人間にはある、なんらかの跳躍が必要である。

ここでも、生態学的世界ではなく、社会的世界においてどのような場所を、どの程度、ある特定のグループが動き回ればそのグループの間に公共の世界が作られるのかという問いが生じることになる。

ギブソンを哲学的・倫理的な観点から援用する河野哲也は、郵便ポストが手紙を出すことをアフォードするのは、あらかじめ郵便システムが存在し、郵便ポストにそのような性質が実在しているからであるとした上で、郵便ポストのような人工物のアフォードは学習によって獲得されるとする<sup>(18)</sup>。しかし、たとえば人身売買システムを考えてみよう。この場合、売る側と買う側は最初から決まっており、売る側と買う側から社会的世界ができあがっているとしても、両者が入れ替わることはほぼあり得ない。したがって、それぞれが移動できる空間は最初から異なっており、公共的認識に至るとは考えられない。これと似たような状況は、資本家と労働者の間にも、権力者と貧しい庶民の間にも存在しうるし、人種間や民族間で生じることもある。

そうだとすると、社会的世界に十分アクセスできること、しかも、そのアクセスが平等であることが、人格や道徳性の成長・発達の条件として必要であるとは言えないだろうか。ギブソンの理論を社会的世界に移入するには、このような社会的世界における人々の自由な移動や参加の問題も併せて議論することが不可欠であると思われる<sup>(19)</sup>。

## 5. 人格のとらえ方

このようにして社会的世界に参加しながら公共世界を築いていく理論を構想したときに、人格はどのようなものとして捉えられるのかということも俎上に上ることになる。このことを検討する上で、ヒントとなると思われるギブソンの術語で示せば、「共変(コバリエーション)」であり、ヴィゴツキーでは、機能間関係のシステムであろう<sup>(20)</sup>。一つの知覚器官にあらたな器

官が加わると、情報が多重化し、冗長になる(複雑きわまりない環境に、より安全に対応できる)だけでなく、二つのシステムの関係が組み替えられる<sup>(21)</sup>。別の言い方をすれば、人格は多様な側面が相互に絡まり合ったシステムとして統一したものとして捉えることができるのではないかということである。

## ・知覚と環境に関するギブソンの構想

次に、今後、社会的世界との比較で検討していくことになるギブソンの生態学的世界の基本的な構想について、『生態学的視覚論』をもとに要約しながら、可能な範囲で研究課題を提示しておこう。

### 1. 動物にとっての環境

ギブソンは、動物が知覚するのは物理学という世界、時間、空間ではないという<sup>(22)</sup>。物理学では、微粒子の単位から天文学の単位にまで及ぶが、動物にとっての環境は通常、ミリメートルからメートル、ミリグラムからキログラムの範囲にある動物の棲息環境であり、環境における時間は数年から数秒で測られる。物理的な時間そのものも動物には無意味であり、動物にとっては変化、事象の継起こそ意味がある。たとえば、人間はたいてい山の浸食作用を知覚できないが、岩の落下は知覚でき、部屋の中の椅子の位置の変化は知覚できるが、原子の中の電子の移動は知覚できない。

ギブソンは動物の棲息環境に、不変な部分と変化する部分とがあることに着目する。居間の床と壁面、天井の配置は相対的に変化しない(持続する)が、家具の配置は変化する。子どもの容姿のなかのある特徴は成長が進んでもあまり変化しない(持続する)が、別の特徴は変化する等々。

物理学や化学では、固体が融解して消失しても、それは固体から液体・気体への「状態の変化」と呼ぶが、動物にとって、それは文字通り消えて無くなるということの意味する。たとえば、氷という固体の上に立っているとき、それが融ければ、体を支持する地面の消失を意味するし、氷の壁が融ければ、光を反射する面が消失するので、避けて通らなければならなかったものが、通り抜けられるものになったことになる。生態学的環境においては、物が燃え尽きたり、溶解したり、粉々に砕けたりすることは、曲がり角を曲がったために何かが隠されて見えなくなることは異なる。隠されて見えなくなった場合には、引き返せば見えるので、不変な部分として知覚されるが、燃え尽きたり、溶解したりしたものは、もとは戻らないので変化する部分と知覚される。

### 2. 媒質と物質と面

地球は、大地・水・空気からなっているが、これらは、いずれか二種類が接する部分で面を作る。地「面」

は大きな抵抗を持つため、陸棲生物の支持面となり、移動や知覚の基盤となる。地面は、大きな抵抗を持つが、水や空気は抵抗が少ないので、その中で生物の移動を可能にする。地面が通常不透明で光を吸収したり反射したりするのに対して、空気と水は、光を通過させるので光を伝達する。さらに、水や空気は、音や震動・波動を伝え、化学的物質を拡散させる。このような意味で、ギブソンは水や空気を媒質と呼ぶ。人間をはじめ、陸棲生物はこのような媒質から伝えられる情報を検知しながら移動行動を制御している。観察者が移動すると、媒質の中の光や音や臭いの情報が継続的に変化する。この変化を通して、動物は光や音や臭いの発信源を探索したり、それらから避難したりすることができる。

### 3. アフォーダンスの理論

ギブソン心理学でもっとも重要な概念はアフォーダンス (affordance) であろう。ギブソンによれば、アフォーダンスとは環境が生物に利用するように提供する「価値」や「意味」のことである。たとえば、開かれた環境における堅い地面は、陸棲生物にどの方向にも移動することをアフォードするが、崖っばちや水際などは危険をアフォードする。障害物は衝突やケガをアフォードする等々。先が見通せないという意味では全く同じ遮蔽縁であっても、平地の向こうが見通せない遮蔽縁は崖の可能性があり、危険をアフォードするが、地面に垂直に立つ壁のようなものは、迂回することをアフォードする。また、アフォーダンスは、観察者・行為者と環境世界の関係によって規定されるので、人間にとって北極の海は、危険をアフォードするが、シロクマにとっては危険をアフォードしない。このように環境が持っている価値・意味をギブソンはアフォーダンスと名付けた。

アフォーダンスの理論の革新的な点は、「価値」や「意味」を「直接知覚」(direct perception) されるものとしていることであり、「価値」や「意味」が、「知覚者の外側に存在する」と考えられているところである<sup>(23)</sup>。それまでの視覚理論では、たとえば、外界がカメラのように網膜に写され、それを脳が何か判断してから知覚すると考えられてきた。しかし、網膜への刺激を何かとして理解しようとするれば、その網膜の像を解釈する「こびと」が脳に住んでいなければならないことになる。この考え方に立っている限り、「こびとの脳の中のこびとの脳の中の…」と無限後退しなければならない。また、カメラのような目を持たないカニのような生物でも、映像実験で物体の接近を正確に知覚していることを考えると、カメラモデルは破綻することになる。視覚は、目の前に物が跳んでくるということを直接的に危険と知覚していると考えるのが適切なのだ。

このように心や脳が先にあって、外界を認知するのではなく、動物は移動しながら、自分の周囲を絶えず流れる包囲光配列や音の同心円や化学物質の拡散や、熱などの、継続的に変化する媒質中の情報を、視覚や聴覚や嗅覚や皮膚感覚を通して受け取りながら、環境から直接アフォーダンスを読み取るというわけだ。

ギブソンは、主観的・客観的の二分法を批判し、価値や意味が、主観的で、現象的、精神的であるのではなく、客観的、現実的、物理的にあるのではなく、アフォーダンスは、客観的特性でも主観的特性でもないか、あるいは、その両方かであると言う。

### 4. ギブソンにおける自己の知覚

たとえば、人が長方形の机に近づいていくとき、机は最初、遠近法によって上辺が短い台形に見える。ところが近づくにつれてそれは長方形に近づき、遠ざかるにつれて視界から消えていく。もし振り返ってそれを見たとき、こんどは最初に長く見えた辺が短くなっていくことに気づくだろう。このとき、人は、机のみを見ているわけではなく、移動するにつれて一定の空間を通り抜けている自分自身の身体を見ている(感じている)。

また、実際に自分が歩くときには、自分のほおや鼻、手や足によって遮られている外界を見ているわけだから、自分を見ていることになる。

このように、ギブソンによれば、知覚したり移動したりすることは、直接自分自身の知覚になるという。

これを、社会的世界に当てはめて考えてみると、人々が社会空間を移動するときに、いったい自分はどう見えるのだろうか。自分を見ている他者を見ながら人は移動していく。主我や客我といった概念との関連性についても考察しなければならないだろう。

また、生態学の世界では、前進したり後退したりしながら、世界と自分の認識を確かめていく。そうだとすれば、社会的世界での前進や後退とは何だろうか。このような問題も、ギブソンの生態学の世界を社会的世界に拡張するとき、避けて通れない問題であろう。

### 5. 人間による環境の改変

ギブソンは、人間は環境が人間にアフォードするものを変えるために、環境を変えてきたと言う<sup>(24)</sup>。人類に資するものをいっそう有効にし、人類に害になるものを抑えてきたのだという。しかしギブソンによれば、それは新しい環境ではなく、古い環境を改変してきたものであって、自然環境と文化環境を区別する根拠は無いという。

この見解については、また論をあらためて詳述しなければならないが、ここで、「人類は自分たちに都合の良いように」環境を変えてきたという場合、同じ人類

の中に、その自然環境の改変を不都合だと考える者が存在するということを考慮しなければならないということだけは指摘しておきたい。実際、ギブソン自身も、このパラグラフの中で、人類による自然の改変を「浪費的」で「思慮浅い」と形容している。そうだとすれば、人類の中でも、ある者にとって好都合なアフォーダンスが、別の者にとっては不都合なアフォーダンスとなるということを意味している。同じ山林が人によっては大規模開発をアフォードし、別の人には水源や癒しをアフォードする等々。したがって、やはり、単なる生態学の世界ではなく、社会的世界とそこでの参加の問題の検討は避けて通れないと思われる。

## 6. ギブソンが描く社会的世界

ギブソンは、観察者にとっての環境の一つとして、他の動物も挙げている<sup>(25)</sup>。他の動物は、無活動な遊離対象（媒質によって完全に取り囲まれる面を持っている対象：たとえば石ころ、棒きれ、地面に接着されていない家具など）と同様に、押されたり、位置を変えられたり、落下したりするが、内的な力で自発的に動くという意味で無活動な遊離対象とは異なる。

他の動物は、餌食であったり、略奪者であったり、仲間であったり、敵であったりする。これらによって他の動物がアフォードするものは異なる。また、他の動物が眠っているのか、目ざめているのかといった一時的な状態でもアフォードするものは異なる。今後の研究課題だが、動物のアフォードするものの持続性と一時性は、社会的世界について研究していく上であらためて考察しなければならない。

また、別の箇所では、性、捕食、育児、闘争、遊び、協力、コミュニケーションに関する相互作用の豊富で複雑なセットをアフォードするとも述べている<sup>(26)</sup>。

さらに、ギブソンは他の動物がアフォードするのは、個々の行動だけではなく、社会的相互作用も含まれるとする。たとえば、性的、母性的、競争的、協調的な社会的交互作用や、社会的毛繕い、遊び、人間の会話など、ある動物が動くとき他の動物が動くといったこともアフォードされるという。

そのうえで、社会心理学にとって、「社会的刺激」、「社会的反応」、「生物学的動因」、「社会的衝動」といった古い概念が不適切であり、アフォーダンスの概念が有力であることを示唆している。

しかし、これだけの記述では、どのように社会的相互作用やコミュニケーションがアフォードされているのかは説明不足であるし、論理の飛躍があるようにも思われる。これも次なる解明課題である。

## おわりに

本稿では、研究構想のアウトラインを示した上で、

まずギブソンの主要な考え方の一部を紹介し、そこに含まれている解決しなければならない問題のいくつかを列挙することにとどめた。もちろん、ギブソンの生態学的知覚論の一部であって全部ではない。とりわけ、時間意識の問題は、充分に取り上げることができなかった。また、ギブソンの思考は、我々がなじんでいる二元論的な思考様式と異なるため、充分説明できたかどうか心許ない。いや、ギブソンを誤解しているのではないかという疑念も払拭しきれたわけではない。

しかし、次稿以降で、ギブソンのアイディアの一つ一つを、生態学の世界と社会的世界の間で行きつ戻りつしながら、拡張してみたり、あるいはすでに拡張を試みている先行研究の理論と比較したりしてみることを通して、ギブソン理論の持つアフォーダンスをくみ取っていくことが、ギブソンの構想に応えることになるのではないかと思う。

次稿では、さしあたり、アフォーダンス理論を哲学・倫理学の領域に積極的に拡張している河野哲也氏の議論とギブソンの理論とを丁寧比較考量することで、道徳教育や人格形成のあり方についてアフォーダンスの理論が提案しうることについて検討していきたい。

## 【注および参考文献】

- (1) J. J. ギブソン著、古崎敬、古崎愛子、辻敬一郎、村瀬旻訳『生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社、1985年。
- (2) 佐々木正人『アフォーダンス 新しい認知の理論』岩波書店、1994年参照。
- (3) 河野哲也『エコロジカルな心の哲学』勁草書房、2003年、同『環境に広がる心』勁草書房、2005年、同『心 は体の外にある』NHK出版、2007年、同『善悪は実在するか』講談社、2007年、参照のこと。
- (4) 『現代のエスプリ』No.494における感情教育の特集は多様な視点から論じられているので参照されたい。
- (5) たとえば香山リカ『私の愛国心』ちくま新書、2004年を参照のこと。
- (6) 佐々木正人『知性はどこに生まれるか』講談社現代新書、1996年。（同書は『アフォーダンス入門』と改名して講談社学術文庫から2008年に再刊されている。）エドワード・リード著、細田直哉訳『アフォーダンスの心理学』新曜社、2000年。
- (7) 『マルクス・エンゲルス全集 19』大月書店、1968年、pp199-200。
- (8) ルビンシュテインとレオンチェフの論争については、駒林邦男『人格・能力の発達論争』明治図書、1979年を参照のこと。
- (9) 『マルクス・エンゲルス全集 3』大月書店、1963年、pp.3-4。なお、原文の傍点部は下線で表示してある。
- (10) 同上。
- (11) ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー著、佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書、1993年。
- (12) アラン・プライマン著、能登路雅子監訳、森岡洋二訳『ディ

- ズニー化する社会 文化・消費・労働とグローバリゼーション』明石書店, 2008年, p.283を参照のこと。
- (13) 鈴木和夫『子どもとつくる対話の授業 生活指導と授業』山吹書店, 2005年。
- (14) ジークムント・パウマン著, 森田典正訳『リキッド・モダニティ 液状化する社会』大月書店, 2001年。同著, 長谷川啓介訳『リキッド・ライフ』大月書店, 2008年, リチャード・セネット著, 森田典正訳『不安な経済/漂流する個人 新しい資本主義の労働・消費文化』大月書店, 2008年など参照。また, データベース型社会についても, これらの液状化と関連している。東浩紀『動物化するポストモダン』講談社, 藤井啓之「メディアと文化の政治」『学校と教室のポリティクス 新民主主義教育論』フォーラム・A, 2003年など参照のこと。
- (15) J. J. ギブソン, 前掲書, pp.176-177。
- (16) 同上, p.215。
- (17) NHK 教育テレビ『地球ドラマチック チンパンジーの知性』2008年9月10日放送。
- (18) 河野哲也『善悪は実在するか』前掲書, pp.47以下参照のこと。
- (19) なお, 正統的周辺参加論では, アクセスの透明性の問題も重要なテーマとなっている。
- (20) 機能間関係のシステムについては, ジェームス・V・ワーチ著, 田島元信, 佐藤公治, 茂呂雄二, 上村佳世子訳『心の声 媒介された行為への社会文化的アプローチ』福村出版, 1995年, 49ページ参照のこと。
- (21) 佐々木正人『アフォーダンス入門 知性はどこに生まれるか』前掲, pp.192-193参照。
- (22) J. J. ギブソン, 前掲書, p.8。
- (23) 同上書, p.137°
- (24) 同上書, p.140°
- (25) 同上書, p.43。
- (26) 同上書, p.138。
- (2008年9月17日受理)